

様式第 1（第 15 条関係）

会 議 録

会議の名称	第 2 回第 3 次和泉市子どもの読書活動推進計画策定委員会
開催日時	平成 30 年 6 月 21 日（木）16 時から 18 時 15 分まで
開催場所	和泉市役所 2 号館 301 会議室
出席者	委 員：（学識経験者）大平委員長、脇谷委員、（関係団体の代表）弓削委員、（子どもの読書活動に係る図書館ボランティア代表）前山委員、（保育園園長会代表）青木委員、（幼稚園園長会代表）田中委員、（小学校、中学校及び義務教育学校司書教諭）池宮委員、井之上委員、（市内の高等学校図書館関係教職員）伊藤委員、（市内の支援学校図書館関係教職員）白間委員、（市の職員）紀之定副委員長、大野委員 事務局：（生涯学習部）堀内次長、（読書振興課）中野課長、関戸課長補佐、西村主事、（和泉図書館）太田館長、（シティプラザ図書館）森川館長、（にじのとしょかん）佐藤、（北部リージョンセンター図書館）小林、（南部リージョンセンター図書室）木村 【欠席】（関係団体の代表）岩本委員
会議の議題	1. 委嘱状・辞令の交付 2. 副委員長の交代について 3. 第 2 次計画の進捗状況について 4. 第 3 次計画（素案）について 5. 今後のスケジュールについて
会議の要旨	・計画の対象を市内在住だけでなく、市内在住・在学とするべきである。 ・計画の基本理念に読解力を加え、読む力をつける取組が必要。 ・中学校になって読書が好きな割合が下がっているので、その課題を解決するための取組が必要。 ・好きだと思える本に出会える取組や、保護者が本を好きになる工夫、また、学校図書館を活用できる取組があればいいのではないかな。 ・会議後に意見がある場合は、6 月末までに事務局に意見をいただく。
会議録の作成方法	☐ 全文記録 ☒ 要点記録
記録内容の確認方法	☒ 会議の議長の確認を得ている ☐ 出席した構成員全員の確認を得ている ☐ その他（ ）
その他の必要事項 （会議の公開・非公開、傍聴人数等）	会議：公開 傍聴人：3 人

審 議 内 容 （発言者、発言内容、審議経過、結論等）

【司会】

開会

委嘱状及び辞令交付

委員紹介、事務局紹介

副委員長の交代（副委員長として、西川委員から紀之定委員に交代）

以後、委員長が進行

【委員長】

18日に大阪府北部で大きな地震がありまして、被害にあわれた方には心からお見舞いを申し上げます。小学校の子どもさんが犠牲にあわれた、ということで、私ども教育に関わっておりますので、ショックを受けております。和泉でもニュースでは2人怪我人が出たとありましたが、他には大きな被害はありませんでしたか。私も堺から来ておりますので、昨日、大学に行く時に、北部の方を通りましたら、ブルーのテントが屋根の上に張られておりました。また、京都の大学ですので、枚方や高槻から来ている学生が多いので、学生の安否を尋ねたりしていましたが、なんとかみんな無事でいるようでした。まだ一週間経っておりませんので、備えておいた方がよい、と思っております。地震というのは、喫緊のことですが、もちろん未来に関わることはありますが、これから皆様方と一緒に取り組んでいくのは、私たちの未来をつくっていく、子どもたちに関わることでありますので、どうぞよろしくお願いいたします。慣れない進行で不十分があるかと思いますが、皆様どうかサポートをお願いしたいと思います。

それでは、議事に入ります。案件1「第2次計画の進捗状況について」を、事務局より報告願います。

【事務局】

（案件1について報告）

【委員長】

只今の報告について、ご意見・ご質問等ございませんか。

【委員】

4ページに、図書館利用が困難な子どものところの、日本の生活に慣れていない子どもの項目がありますが、何人くらいの子どものがいらっしゃるのかは把握されていますか。

【委員】

指導室です。数値的なものは持っていませんが、数十人おられます。海外から家族で来ている子どもさんもおられます。

【委員】

それは、増えているのですか。

【委員】

微増ですね。急激ではないですが、家族で仕事の関係で来られる方もいらっしゃいます。

【委員】

学校では、そういう子どもたちに対しての支援策はしていますか。

【委員】

日本語が全くダメな子どもさんもいますし、少しは出来る子どもさんもいますので、そのレベルに合わせて、別の教室で学習したりしています。

【委員】

だんだん日本も国際化してきていますので、大変でしょうが、人数的にどのようなものかをお聞きしたかった。各学校で一人とかいらっしゃるのですか。

【委員】

そのような方がいない学校もありますが、同じ国の人が集中している地域もあります。

【委員長】

他にございませんか。では、次に案件2「第3次計画（素案）について」を、事務局より報告願います。

【事務局】

（案件2について報告）

【委員長】

只今の報告について、ご意見・ご質問等ございませんか。皆さん、協議しましょう。5年間、これから和泉市はこれに従って読書活動をしていこう、ということでこの計画をたてています。ですから、これから5年間、私たちにかかってくるのだと思っております。最後、24ページにお名前が書いてあったと思うのですが、この計画に私たちは関わっているということが、このように示されます。ですから、それを恥ずかしく思わないように、誇りに思えるような計画にしていきたいと思っておりますので、忌憚の無いご意見をいただけたら、と思います。

【委員】

いくつかお尋ねします。まず一つは、高校生、というのがいくつか出てきています。和泉市の中には、和泉総合高校と、伯太高校、信太高校は高石市とまたがっているのですが、逆にならぬのかはわかりませんが、そこに通う高校生はもちろん数に入っていると思うのですが、逆に和泉市に住んでいるが外の学校にいつている子どもたちはどうなっているのかお聞きしたい。それと小学生のことでお聞きしたいのですが、基本的には小学生は、放課後

に遊びに行くのは校区外に出たらダメというのがあると思います。和泉市の場合、図書館に行こうとして校区外に出ることができないとすれば、図書館の近辺の子どもしか来れないと思うのですが、その辺はどうなっていますか。あと最後に、数値目標の中に、子どもというのが結構出てくるのですが、29番のところは0～18歳と書いていますが、書いていないところはどのようになっているのか、教えていただきたい。

【委員長】

まず高校生の対象が、市にある高校の生徒のことを言っているのか、それとも市在住の高校生を対象にしているのか、ということですが、事務局、どうでしょうか。

【事務局】

計画の対象として、14ページに、市内に住む0歳から18歳までの子どもということで、市外に通う高校生であっても、市内在住であれば対象としています。

【委員】

ということは、市外に住んでいる高校生は対象になっていないのですか。

【事務局】

数の統計上では、今のところ、市内在住の子どもの統計になっています。

【委員】

この子が和泉市から来ているとか、正直、高校の中ではわかりにくいです。市内在住の子どもの統計ということですね、わかりました。

【委員長】

よろしいでしょうか。あとは、小学生の校区外の話と、最後の質問で、子どもというのは、0～18歳というのがついていてもついていなくても、14ページにあります、市内に住む0歳から18歳までということでよろしいでしょうか。

【事務局】

はい、そうです。その年代に応じたところで記載されているところは、小学生であればその年代ということになるのですが、ここに掲げている子どもというのは、基本は市内に住む0歳から18歳までということになります。あと、校区外については、学校での指導は、基本は校区外へは一人で出てはいけなくなっていますので、なかなかその近くの地域に住んでないと、図書館へ行くのは難しいと思います。

【委員長】

それでは、そういう子どもたちにはどういうことができるのか、それをここで話をすればいいのですね。他には何かありませんか。

【委員】

統計を取るときにこの数字でいくというのはわかるのですが、実際に、同じ高校の中で、この子は和泉市民やから対象にして、また和泉市民でない子は対象にしない、ということではないですね。

【事務局】

はい、それはないです。

【委員】

ですね。これは統計上の便宜的な数字ということですね。

【委員】

でも、統計としては入っていないのですね。

【事務局】

はい、数としての統計では拾えないところがありますので。

【委員】

和泉市にある高校に通っている和泉市民ではない子どもと、逆に、和泉市に住んでいて和泉市外に通っている学生と、結局差し引きになるので、おそらく統計的にはさほど変わらないかと思います。

【委員】

市内に通っている高校生と、市外に通っている高校生の、数自体は把握しているのですか。

【事務局】

高校生全体の町別の人口は出ていますが、市内に通っている高校生と、市外に通っている高校生の数については、個人的な情報になるので、把握をするのは難しいと思います。

【委員長】

むしろ、高校で市別の統計を取ってはいませんか。

【委員】

高校の中では、言えばもらえると思います。しかし、数だけはわかっても、どの子が和泉市民というのはわからないと思います。

【委員長】

個の把握は、必要ですかね。

【委員】

この表現では、誤解を招くかもしれないと思います。実際にはそんなことないと思いま

すが、和泉市の高校に通っていて、あなたは和泉市在住ではないから対象でないですよ、というように。

【委員長】

それでは、在住・在学というのはどうでしょうか。

【事務局】

はい、それでは、在住・在学という表現にさせていただきたいと思います。

【委員長】

他に何かございませんか。

【委員】

読書推進に取り組んできて、第2次の時には数字が上がっているが、第3次の時にまた落ちている、というのが全体にありますよね。やはり、一生懸命取り組んだら、それなりの成果はあるのですが、落ちてきていることに対して言えば、おそらく努力はしていると思うのですよ。ここに書いているようにいろいろな取組をされていて、でも努力していても落ちていく、と。それで、大変だなと正直思いました。未就学児や幼稚園児に対して、それぞれのところで頑張ってくれていて、例えば、読み聞かせは、子どもは喜んで聞くのですよ。しかし、年齢が高くなるにつれて、一人読みが減ってくるのは、やはり読む力の獲得というのか、そこのところを落ちていかないようにするには、読む力をどうやってつけてあげるか、ということになるのではないかと思います。そういう意味では、読む力をつけてあげるためには、学校で何ができるか、を考えないといけないと思います。これからの長い人生を生きていくときに、読む力はすごく大事で、それをどうやってつけていくのか、逆に学校以外のところでは、教師は関わりもできないし、素人ができるものでもないで、その辺の取組が必要ではないか、と思います。やはり、和泉市の場合は、学校支援司書の人長いこと配置されて、皆さん頑張ってくれていますので、その辺のきちんとした位置づけなり、そういうのをもう少し突っ込んで、施策として考えていけばいいというか、結局伸びしろというのは、学校での取組だと思います。ボランティアの人は、精一杯頑張ってくれています。それ以外のところで、何かないのかな、と思っています。だからそういう意味では、きちんとした位置づけされた学校司書の人いて、司書教諭の先生と一緒に協力して、読む力をつけてあげられるような、何かをできるのではないかな、と思っています。ここでも、計画の基本理念のところ、読書の楽しさや、読書によって得られる効果として、思考力・想像力・表現力、と書いてくれていますが、ここに、読む力についても、足せばいいのではないか、と思います。そういうのを想定した読書についても考えないと、年齢が上がるにつれて、どんどん下がっていくばかりではないか、と思います。

【委員長】

同じようなことを考えておまして、日本語でいうところの読書と、リーディングとは、違うと思います。日本語で読書というと、本を読む、というイメージがありますが、リー

ディングと言いますと、本を読むことに含めて、読解力というのが加わり、総合的ですよ。その読解力をつけるためには、どうしたらいいのか、ということだと思います。皆様、この表をご覧になったと思うのですが、この表をみて課題というのは、中学校でガーンと落ちているのが課題ですよ。それというのは、自立した読書ができる年代になって、落ちているのです。小学校まではとてもよい傾向にあるのに、自立ができるようになったら落ちるといのは、やはり、中学校になったときに落ちないような施策を、ここで考えないといけないと思います。ボランティアについても、先ほどの委員と同じことを考えていて、ボランティアでやってくれているので、アンドモアなのです。市の政策があって、ボランティアが一生懸命できるのだと思います。ですので、ボランティアのやりがい搾取になってはダメだと思っていて、それは学校支援司書も同じなのですが、やってくれるから、生きがいがあるから、やりがいがあるから、お願いします、ではなくて、市はもう少し、その方々がやりやすいような、それはボランティアや市のためではなくて、子どもたちにそれが伝わり、繋がっていかなくてはならない、最後は全部子どものためなので、そこに繋がる施策を、ボランティアに協力を願う、であって、市が中心になってやっていかなくてはいけないと思うのですが、ちょっとこれを読ませていただくと、やはりボランティアに重きを置かれているところがあるのではないかと、思います。その辺りはどうですか。また、小学校、中学校、などの先生方にお聞きしたいのですが。学校の現状はどうなっていますか。中学校はどうですか。

【委員】

中学校の代表です。司書教諭の免許を持っていますが、正直、週20時間以上の授業を持っていて、時々は図書室にも行っていますが、図書室まで意識が回らないというか、教師の方も手一杯で、また子どもの方も、給食を食べたら昼休みもない状態で、中学生は時間的に余裕がなく、放課後になればクラブがあるという状態です。うちの学校では、支援司書が頑張って図書室を休み時間は開けてくれているのですが、放課後は開けていても生徒があまり来ないので、お恥ずかしい話ですが、このように余裕がない状態です。自分は、司書教諭で何をやっているのか、というと何もやっていません、恥ずかしい話ですが。でも、それではダメだと思うし、5年間で変わっていくのなら、変えられるように、司書教諭になったのですから、図書室のことを主になって考えていくことができ、支援司書の先生にはお手伝いをしてもらいたいような、そういうスタンスでいけたら、と思いますが、申し訳ないのですがそこまではできていません。

【委員長】

全然申し訳ないことはなくて、それが現状だと思います。それを受け止めて、今できないから5年後もできない、ではなくて、では何ができるか、どうしよう、ということだと思います。

【委員】

余裕を生んでいただけるように考えていただくことがあれば、その上でやっていきたいと思います。委員会活動も、時間的にやっていく余裕がありません。その上でやっている学校もあると思うのですが、現実には本当に、きちきちの状態です。

【委員長】

私もよく学校を見せていただいているので、いろいろな学校があるのは存じ上げたうえで、お話を伺っています。小学校はどうでしょうか。

【委員】

小学校の代表です。小学生の子どもは、高学年の子でも読み聞かせは好きです。ただ、一人読みになると、先ほどもありましたが、どんどん読めるようになっていく子どもと、読めない子どもと、分かれていくんですね。読めない子どもは、読書の時間もずっと同じ本を開けていたり、絵だけ見えていて文字や文が読めなかったりするので、やはり読む力はあると思います。それでも授業の中で、先生たちもその辺を必死で考えてやっているのですが、なかなか難しいところです。あと、絵本はいけるけど、ジュニア本に繋がらない課題も、昔からずっとあって、その辺は頑張ってもなかなか現状は変わらないような印象を持っています。先ほど中学校の先生が仰ったように、小学校でも、図書の時間は週一回あるのですが、高学年になると他の教科におかれて、なかなか図書室で読み聞かせや一人読みをしたりする時間は確保できないのが現状で、朝の読書の時間に読んでいる、という感じですね。本が好きな子どもは、自分で図書室に行って本を借りますが、そうではない子どもはなかなか読む冊数も増えていかないと思います。やはり、本の楽しさを感じられた子どもは、友達とおもしろかった本について情報交換している子もいますが、そうではない子ども、それよりも外で遊びたい、というような子どももたくさんいますので、その辺りを小学校では感じています。

【委員長】

学校でもいろいろな努力をしていただいているのは、私も見せてもらったり、研究をしているので分かっているのですが、難しいですよ。それこそ絵本からのステップというか、小学校に行くと、みんな字を習うから読めるのだけれど、実際はそうではなくて、読むということには個人差があって、それをどう個別に伸ばしていってあげるか、というのがとても大きな課題になるのは感じています。指導室の委員、いかがですか。

【委員】

皆様が言われているように、読む力、読解力が求められていると思います。全国学力学習状況調査でもそうですし、国語や数学の問題でも問題を読み込めないと、解答に辿り着けない、と特に重要視されていますので、当然図書の活動だけに限らず、いろんな教科の中にも、力を入れるということを各学校の先生方にも努力していただいているのですが、その辺りをこの学校図書館の活動とリンクしながらやっていくのが大事なかな、と思っています。それと先ほどもありましたが、支援司書の役割はすごく力を発揮してやっていただいております。任せている分があるかとは思いますが、その辺りの働き方に関しては、これから検討していきたいと思っています。

【委員長】

学校教育の中でもいろいろと工夫をしていかなければならない、と先生方自身が考えて

おられる、ということですね。支援学校の方ではどうでしょうか。

【委員】

支援学校の方では、給食に時間を取られるお子さんが多く、昼休みは、自立活動ということで自転車に乗る時間を取ったりするので、なかなか図書室に足を運べない子どもが多いのが現状です。実際に、図書室については、開いているのが昼休みですが、それも毎日開くことができていないのが現状です。ただ、本に触れる機会を増やすために、高等部が小・中学部に読み聞かせをしたり、後は年に一回、図書室に足を運んでもらえるように、図書の購入希望のアンケートを各クラスに取ったりしていますが、なかなか数を増やせないという現状です。

【委員長】

特に支援学校はいろいろな子どもがいらっしゃるから難しいと思います。高等学校の方ではどうでしょうか。

【委員】

高等学校の代表です。この中のデータにある通り、家で本を読まない、というのはうちの学校の生徒でもすごく感じます。3分の1、うちの学校ではもっとデータ的には高いかもしれない。クラブ活動もあまり成り立たなくて、運動部はゼロに近いくらい少ない。なぜかというと、中学校時代は、バイトをできないからクラブをやっていたが、高等学校になるとバイトができるので、バイトを取る子がほとんどの学校です。もちろん先ほどから言われている、読む力は必要ですが、うちの高校では大学に行く生徒もほとんどおらず、専門学校と短大を合わせて20人位で、後はほとんどの生徒が就職というような学校になると、別にそのようなことは必要ないと思い込んでいる生徒がたくさんいます。後は、図書館自体はもちろん本を読むところなのですが、うちの学校の場合は、心の休まる、ゆっくりできる場所となっており、その中で私が思ったことは、この会議の話を聞いていると、本を読むことがいいことで、そうではないことが悪いことのような気がしてしまいます。なぜそう思ったのかといいますと、私は以前に支援学校に勤務していて、その時に、そういうことができない子どもが実はいるのです。本を読めない、字が読めない、そのような子どもに対して、本当にそれがいいことなのか、というのを思いました。それを押しつけたら、パニックになってしまう子どもが実際にいるので、そのような子どもにとって、本当に本を読ませることがいいことなのか、とすごく感じるのと、小学校時代にみんながたくさん本を好きだ、という中で、自分が本を読めないとか、嫌いだとか言える子どもはなかなか少ないと思います。そのような子どもに無理に押しつけるのではなくて、放っておく、何もしないということではないですが、見守ってあげて、その子どもが大人になって本を読みたくなれば読めばいいのではないかと、思っていて、小中高だからといって、押しつけではないですが、そこまではしないのではないかな、と感じています。

【委員】

それについてですが、本を読まなければならない、ということはありません。ただ、い

ろいろありまして、例えばLLブック、これは北欧のスウェーデンでは易しく、分かり易く本を読めるというのがあります。私は、図書館に長く勤めていまして、いろいろな子どもがいました。特定のアニメばかり読む子ども、LLブックになっているベストセラーを借りる子ども、やはり興味を持っているのですよ。本当に易しくなっていて、修飾語などは省いて、ストーリーがわかるように、そういう形で提供するというような試みも少しずつ広がっています。日本でもLLブックの普及や、図書館の利用案内でも分かり易く書くように改めていっており、読まなくてもいいということではないと思います。逆に、読めるようにする努力をして、提供するべきではあると思います。その上で、読まないことを責めるようなことは絶対にないし、本についても日本では物語ばかり重視していますが、図鑑でも虫の本でもいいのです。図鑑や写真集は、本嫌いの子どもでも喜んで見ます。本の伝え方で、物語となれば興味の少ない子どももいます。やはりその子どもにあった本、出会いのチャンスをつくる努力はするべきではないか、と思います。

【委員長】

はじめにリーディングと言ったのはそういう意味で、本を読むだけの読書ではないと思っています。この間、全国学校図書館協議会から夏の大会のことで連絡があり、その時に言われて口論になったことがあって、情報教育と学校図書館について講演をするように言われたのですが、どういう主旨かを尋ねたら、真っ当な子は図書館とインターネットで調べるけれど、インターネットでしか調べない真っ当でない子がいる、と言われたので、それはおかしい、と言いました。何で真っ当か真っ当でないか、本を使えば真っ当なのか、インターネットを使うから真っ当でないのではなく、私たちは子どもたちに、情報を読めるように、リーディングをできるような教育をしていかなければならないと思います。それは本に限らないと思うし、インターネットも読まないと読めない、ですよ。だから、ずっとインターネットを見ているのは、ゲームをしているわけではなく、もしかしたら本を読んでいるかもしれない。いろいろなコンテンツが中には入っているので、入れ物が紙の本なのかデジタルなのかは別として、中の情報をどう読めるか、というのがリーディングで、それができる子どもたちということを考えていかなければいけないと思います。それで、和泉市は一生懸命、本を好きな、読む子どもたちを育てている、ということなので、その子どもたちが自立した時に自分で本を選んで読むのが、下がっているというのがやはり課題なのかな、と思います。ですので、学校ではどのようなことを考えてされているのか、を順番に伺っていました。それでは、まだ字が読めないという子どもがいる、保育園や幼稚園の先生にも伺っていききたいと思います。保育園ではどうですか。

【委員】

保育園の代表です。0歳の子どもでも絵本を見ます。知らない言葉を絵本から見て学ぶという感じです。ただ、幼児になると、子どもによって発達年齢が違うので、やはり集中できない子どももいます。4歳だけど赤ちゃんの本が好きという子どももいるし、子どもは1回好きになると、同じ本を何回も読むのですよね。ただ、お母さんが、絵本の貸し出しの時に「その本、この前も借りたやん。」と言うので、「お母さん、子どもって好きな本ができると何回でも見て、見るたびに新しい発見をするのですよ。」と言うと、「そうなのですか。」と仰います。保護者の方で、絵本の貸し出しの時に、「この本、小さい頃に

読んでもらった本です。これ、借りてもいいですか。子どもに読んであげたいです。」と仰る方もいます。やはり、小さい頃に読んでもらった記憶があり、その時に楽しかった経験をされている方は、大人になっても心にいつまでも残っているのかな、というのはすごく感じます。やはり子どもが理解できる本を、十分読んであげることが大事であると思います。

【委員長】

コミュニケーションですものね。子どものおかげで、新幹線の顔が全部わかるようになりました。

【委員】

子どもによって、虫の本、電車の本、など、そればかり集中する子どもがいます。保護者の方は、他の本も読んでほしいと言うのですが、やはりその子が興味を持てる本を十分読んであげると、いろいろなところに視野が広がっていくというお話もさせてもらったりもします。

【委員長】

まさに自由な読書ですね。幼稚園はいかがですか。

【委員】

幼稚園の代表です。保育園の先生が言っていたことが、ほとんど幼稚園にも当てはまりますが、子どもたちが本を大好きになるきっかけは、現場であるか、家庭であるか、だと思います。家に帰った時に、「お母さん、本を読んで。」と言い、10分位だと思いますが、コミュニケーション、本と一緒に読む時間や空間が幼児期には大事で、そこから本と一緒に読んだ、見た、また文字が読めるようになって、お母さんやお父さんに読んでもらうのを何回も繰り返す中で、本が好きという子どもに育っていくのかな、と思うので、保護者の方に、本を読むのは大事だということをお知らせしていく機会を多く持っていくことが大事だと思います。

【委員】

中学校の代表です。少し気になるのが、朝読の時に本を持っていない子どもに、「おうちに本ないの？」と聞いたら、「ない。」と答える子どもが結構多いです。そういうことも考えると、先ほど言いたかったことは、やはり図書室をもっと活用できるようないろいろな余裕が欲しいと思います。学校での生活時間帯がいろいろあるので、私ができることではないかもしれませんが、図書室が勿体ないと思います。もっと活用できるような方法があれば教えていただきたい。

【委員長】

私は、今の先生の言葉に元気が出ました。何かやろう、できればいいな、と思いました。

【委員】

本がなければ読みようがないですしね。やはり図書室の本が一番利用しやすいかな、と思います。今は副担をしているのですが、そのクラスに、学級文庫というのがないので、私が読んで面白かった本を、私の名前を書いて置いています。やはり、きっかけをつくってあげるのが大事だと思います。でもどうしたらいいのか、考えます。

【委員長】

みんなで考えましょう。それでは、学校のお話を聞きましたが、ご家庭はどうなのかな、と思って、まずは子育てサークルではどうでしょうか。

【委員】

子育てサークルの代表です。やはり、本離れはお母さんからですね。お母さん、お父さんはあまり興味がないのだろうな、と思います。中学生からドーンと利用者が落ちるとするのは、やはりいろいろな情報を収集する手段がいっぱいあるから、本だけに頼らなくてもいい、ということですよね。自分たちの興味があるところは、SNSや、そういう世界なので、お母さんやお父さんの興味を引くような、というか、この前テレビを見ていたら、近畿大学の図書館を紹介していて、マンガがあって、そのマンガに関連した普通の本が横に置いてありました。うちの子どもを考えますと、逆なのですが、ハリーポッターを読んだ、だから映画を見る。でも逆の子もいるんですよね。ハリーポッターの映画を見て、この本もあるんや、と。そういう連携といいますか、本だけを読みなさい、と言ってもダメなのかな、と思います。家庭ですと、私たちは子育て支援の施設をやらせていただいているのですが、本の前には子どもだけで、お母さんはこっちでおしゃべりしている、という構図も結構あります。もちろん、お母さんの膝にいる子どももいるのですが、反対側でお母さんは携帯を触っているというのが、比率では多いです。ですから、まずはお母さんを惹きつけていくべきだと思います。何かいい方法はあるのかな、と思います。お母さんやお父さんが本を読んでいると、子どもたちは、読めないけれど真似をして、読んでいる振りをします。その辺りからも何か入っていけるのではないかと、思っています。

【委員長】

よく、子どもに本を読ませるにはどうしたらいいですか、と聞かれた時に、「お母さん、今日帰りに本を買って帰って、本を読んでください。」と言ったりもします。子どもは、大人を見ますよね、まずは大人が見本を示さなくてはいけないのかな、とも思います。では、図書館ボランティアの代表の方は、いかがですか。

【委員】

ここにいる人たちは、皆さん本が好きですね。だから、その人たちが議論している、ということにも問題はあるのかな、と思います。本を読むのを嫌いな大人はいっぱいいますからね。まず基本が、本が好きだから、みんな好きであろう、と、思っているところにも、ここの中の問題点でもあると思います。それと、中学生になって、下がってくるのは、仕方ないと思います。中学生は忙しすぎます。受験が目の前にあって、そのために帰ったら塾に行かなければいけないし、と。それは我が息子もそうでしたし、私自身を見ても、中学校の時に、本を読んだかな、と思います。小学生の時は、読書感想文などで、しなくて

はいけない、という課題があったから、本屋さんに行って本を探して、夏休みにこれなら友達と被らないから絶対に選んでもらえる、というように必死になって、その結果、あかんかったな、ということもありました。中学の時は、授業が終わったらクラブに必死になって、帰ってきてお風呂入って、もう寝ないといけない、というように本を読む時間はなかったように思います。そして、高校になれば、通学中に文庫本を持って行って、話題の本を読んだりしたように思います。そして、ここに書いてあります、想像力というのは、今の子どもにはない、というのは感じます。雲を見て、「何に見える？」と聞いた時に、「雲」という答えが返ってきた時に、すごくショックでした。「雲やね。でも、あれ、ゾウさんに見えないか？」って聞きました。この子ら、小さな子でもそんな時間の余裕はないのかな、空を見上げて、あれは何に見える？なんて、お母さんが聞いてくれないのかな、と思います。想像力を養うのには、絵本よりもまず、そのようないろいろなところから入っていかなければいけないと思います。私は、初期のブックスタートで4か月健診の時に、お母さんたちに話をさせていただいていましたが、1冊でいいから子どもに大好きな絵本をつくってあげてください、と言っていました。そうしますと、お母さんたちから「私はぐりとぐらが好きです。」とか、「はらぺこあおむしがすごく好きです。」とか仰ったりしました。ですから、「それは、お母さんが小さい時に、自分のお母さんから読んでもらったから好きになったのではないですか。与えてもらったからでしょう。だから、今日持って帰るブックスタートの本を、4か月ですから、まずは口に入れると思いますが、それを汚いと言うのではなくて、これはあなたの1冊目の絵本だよ、と言ってあげてください。」と言っていました。みんな小さい時には親に読んでもらっているが、自分が子どもを産む時代になれば、そのことが抜けてしまっていて、絵本だけではなく、本にも触れていない、本を読むなら連続ドラマを見た方がいい、というようになってきているのもあるし、それに皆さん、今は忙しいのだと思います。もう少し、これは和泉市だけで考えることではないですが、国の施策としてやらなければいけないことだと思うのですが、一人ひとりが時間に余裕がもてるようになったら、いけるのかな、と思います。私自身、そんなに一生懸命に本を読んだ記憶はありません。

【委員長】

それぞれの皆様の経験はとても大事で、国を動かすって難しいと仰ったけれど、難しくないと思っていて、人が動くと、自治体が動いて、それが大きな波になって、国が動く、ということがあるので、施策というのは、外から来るのと、中からいくのがあるので、ここでは中からの施策なので、国から言われたからではなくて、私たちの市ではこうしたい、という意見を表明するのが大事ではないかな、と思います。それでは、副委員長はどうですか。

【副委員長】

子どもが読書に親しむ環境づくりというところで、皆さんよくお聞きだと思いますが、子どもの貧困というのがありまして、やはりそういった格差というところで、子どもになかなか本が行き渡っていないような現状があるのかな、と思います。ですから、無料で本を借りることができる図書館の役割が今後ますます必要になってくるのかな、と思います。第2次計画を読ませてもらったが、ここが大きく違う、とアピールできる場所も必

要なのかな、と思います。私が言ったのは、ほんの一例ですが、何かあればいいと思います。

【委員長】

保護者の方、ボランティアの方、図書館のお話、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、支援学校、それから教育委員会のお話も聞かせていただいたのですが、これを全部網羅するのはすごく難しい話で、どこかにスポットを当てる必要があるのではないかな、と思います。そこだけを手厚くするのではなくて、全体としてボトムアップしていかなくてはいけないのだけれど、全部に力を注ぐと分散してしまう気がします。どこか一つ、今回の重きを置くのはここだ、という対象を決めた方が、もしかしたらこの話は進んでいきやすいのかもしれませんが、それが、学年や年代でいくのか、環境でいくのか、などを決めないといけないのですが、どこか焦点を絞っていった方がよくないですか。第2次計画を読ませていただくと、家庭と地域でしたでしょうか、これは私が感じたことなので、皆さんのご意見をいただけたらいいのですが、第2次計画では、どちらかというと未就学児から小学校までのお子さんに焦点を当てたプログラムになっているのかな、と感じています。今回は、どこに焦点を当てていくのかによって、計画自体が大きく進んでいくのではないかな、と思います。

【委員】

提案があります。数値目標もすごいと思いますし、よく頑張っていると思います。しかし、今までの話を聞いていて、発想をガラッと変えて、誰もが好きだと思える本と出会える、そういう設定にしてもいいのではないかな、と思います。それと、読む力というのは、例えばアメリカなどで結構流行っている、犬に本を読んであげる、というのがあります。これは、あなたの可愛い犬に本を読んであげて、と言えば子どもは読むんですよ。それによって、子ども自身が読む力を獲得できるようになります。子どもに本を読むときにはいろいろな手法があって、そういうことも検討してもらって、数値目標もガラッと変えてしまってもいいと思います。逆にもっと基本的なデータは必要ですので、そのまま出してもらった方がいいと思いますが、逆に好きな本と出会える、そこに今回は発想を変えてそうしてもいいと思います。子どもが本を好きになる方法はいくつかありまして、アニメーションという方法もあって、読む力をつける方法もあります。そういうことを検討してみるのもいいのではないかな、という提案です。

【委員長】

好きな本に出会える、何を。

【委員】

今のところは、検討するしかないと思うのですが、好きな本と出会えたら、それは図鑑でも何でもいいと思います。

【委員長】

好きな本に出会うというのは、それはすごく素敵だと思います。ですが、どこでどうや

って会うのか。

【委員】

それは、家庭で出会える場合もあるし、図書館や学校、また地域で出会える場合もあります。

【委員長】

そうしたら全部になってしまうので、好きな本に出会えるというのが、本当は全部で出会えないといけないのだけれど、どこで会えるのかを設定する必要があるのかな、と思います。もしかしたら、お母さんに行くブックスタートで会える、としたら、そこで会ったらもういいのか、ということですね。

【委員】

それはそうではないのですが、どこかの時点でこの本が好き、と思える本に出会えたらいいのではないかな、と思います。

【委員長】

それはすごくわかるのですが、先ほど言っていた話では、本に限らない、という話も出ていたので。

【委員】

紙の本は、メディアにはない、紙の本のよさがあるので、好きな本に出会えたらいいと思います。

【委員】

ちょっといいですか。それは、やはり小学校だと思います。一番ターゲットとして持つていくのは。やりやすいと言えば小学校の子どもには失礼ですが、6年間通じてのを見ることができるから。

【委員長】

でも、教育計画と考えると、やりやすいところからやるのが教育の計画ではなくて、やはり課題を持っているところにサポートしていくことを考えないといけないと思います。

【委員】

中学生で、落ちているのなら、まず今の小学生から育成していって、その子らが中学生に上がった時のことを考えて。

【委員長】

この表を見ていると、小学校は出来ているのですよ。

【委員】

出来ているけど、落ちているわけですね。

【委員長】

そうです。落ちています。ですからそこが課題だと思うのですよ。

【委員】

では、小学6年生ということですか。

【委員長】

そうかもしれません。小学6年生と中学1年生をターゲットにする、というのも一つの方法だと思います。

【委員】

高等学校の代表です。皆さんの話を聞いていまして、昔の話で、私たちの下の年代の人の話ですが、みんなが持っている時代に、子どもにテレビゲームを与えなかったのです。本をたくさん与えて、それで本をたくさん読ませて、親御さんは、子どものことを本が好きで子だと思っていた、と。それを、大人になって聞いたら、やはりゲームがやりたかった、と。この話は結構有名だと思うのですが、だから、そうなってしまったらダメだと思うんですよ、この会議自体が。先ほども言いましたが、押しつけみたい。あと一つ、好きな本に出会えるというのは、すごくいいことですが、それに関して、東北の方の話で、ある本屋さんに一万円を預けて、その本屋さんが本を選んでくれるらしいのです。今までに自分の読んだ本や好きな本、好きなことをカルテに細かく書くんです。全部を書いた時に、その本屋さんがその子にあった本を選んでくれる、と。私もそれをしたと思ったんですよ。学生が結構、面白い本や楽しい本、泣ける本などをないですか、と聞いてくるんです。実際それで与えるのではなくて、その子の生きている中での生活環境などを踏まえて、そのスキルを私が持っているかと言えば、疑問があります。そしていろいろな本を司書がたくさん読まない、と、与えてあげることができないので、そのスキルも大事だと思います。実際に、その本屋さんは毎日たくさん本を読んでいたが、私はそこまで本を読める状態ではないし、今まで読んだ本の中でいい本もありますが、必ずしもその子どもがその本をいいかどうかはわからないから、やはりそういうスキルを育てるのも大事な、と思います。それがなければ、好きな本をその子どもに対して与えるのは難しいと思います。

【委員長】

自分で選べるのが一番で、コミュニケーションが大事ですね。

【委員】

そのコミュニケーションが、図書館にきて短時間で話して、では難しいと思う。1冊でなくても何冊でもいいと思います。与えた中で、いい本に出会えたらいいのですが。

【委員】

それができるのは、学校図書館ですよ。

【委員】

そうですね、市立図書館では難しいと思うので、やはり学校図書館だと思います。

【委員】

私もそう思います。学校図書館は、池田小学校の事件があってから、全部閉鎖されていますよね、親が入るにしても。その中で、親子で活用できるような曜日を各学校でつくっていただいたら、学校なら親子で行きやすいですよ。それを市立図書館まで行こうと思ったら、やはり車に乗れないから今日は無理、というようになってたりもすると思いますが、学校は地域の中にあるから一緒に行くことも可能かな、と思います。教育委員会の方に考えていただかないといけないと思います。学校図書館を充実して、そのために支援司書の方もいらっしゃるのですから、興味ありそうな本を並べていただいて。私も会議で中学校の図書室に行きますが、やはり興味のありそうな本を支援司書の方は置いていただいています。その辺の充実は、市立図書館では無理かな、と思います。すみません、市立図書館では無理とか偉そうなことを言ってしましまして。

【委員長】

図書館の館長さんは何か考えていると思います。それでは、今まで出てきたことで、対象は小学6年生を考えないか、という話が出てきました。それから、学校図書館が大事だよ、という話も出てきました。そこに、和泉市独自ののですが、学校図書館に支援司書がいらっしゃる、ということで、それを利点として何かできないだろうか。もう一つが、これは先ほどの事務局からもありましたが、保護者が本を好きになる工夫ということ課題としてこの中にもあげられていて、それと繋がってくるのかな、と思うのですが、親子で活用できる図書館というものがあればいいのではないかと、いうのが出てきました。この話は、明日の朝までも続いていきそうなので、少しまとめていきたいと思っています。では、対象者はどういうコンセプトでいきましょうか。いくつかランダムでいいので出していただいて、カテゴリーに分けていけば、何か一つのものが出てくると思うので、今回はいろいろと出していただいて、それを基に次回で検討していく、というのではいかがでしょうか。今、この場でまとめるのはすごく難しいので、皆様からどんどん提案を出していただいて、事務局と調整しながら次回に活かしていきたいと思っています。

【副委員長】

私は、読書を自分の成長を確認できる手段だと思っています。例えば、5年前や10年前に読んだ本をもう一度読むことによって、小説ならその登場人物の気持ちがその時にはわからなかったけど、読み返すことによってすごく理解できるとか、そういうことによって、自分が成長していると感じることがあります。例えばですが、小学校の時に読んだ本を、中学校になった時にもう一度読むことによって、簡単に感じられるかもしれませんが、奥深くまで読み取ることができたり、また違う感じ方をするかもしれません。中学生になって、本を読む機会が少なくなるということですので、そういう取組も面白いのではないかと、思います。

【委員長】

そうですね、読む年によっても、同じ本でも感じ方が違ってくることはあります。具体的には、どういうことを考えていますか。

【副委員長】

小学校の時に、好きな本に出会えた子どもがいると思うので、その本は何年経っても印象に残っていると思います。その本を、年数を経て読んでもらうということで、どういう場を設定するか、についてはまだ考えておりませんが。

【委員長】

そうですね、小学校と中学校が連携する上での選書の中にも影響してきますよね。

【副委員長】

中学生が、本を読む機会を増やすための手段になるのかな、と思います。

【委員】

小学校の時に、その子たちが読めてたのか、と思います。それを30代の人たちに聞いたら、若い時にあんな本を読んで、もう一度その本を読んでみようかな、というのは出てくるように思いますが。中学生にそれを聞いて、小学校の時に読んだ本と言われたら、絵本とかになると思うので、経験値が浅いですよね。

【委員】

ということは、アンケートを取るということですか。

【委員】

そうですね、まずはアンケートになりますよね。

【委員】

小学校の代表です。皆さんの話を聞いて思いついたのが、今まで見てきた子どもたちを見ても、おうちの人の本を読む環境にある子どもは本を読むし、定着するのですよね。世代が上がっても、小さい時に絵本を読んでもらってきたり、おうちの人自身が読書を楽しんでいる人は、中学生になっても読書が続けている子どもが多いように思います。学校図書館に、保護者の人に入ってもらって本を触る機会にはほぼないので、小学6年生がターゲットとしたら、保護者参観の後に、子どもと一緒に図書室で本を選んでもらって、本の貸し出しをするということくらいなら、出来そうな気がしました。

【委員長】

そうですね、面白いというか、できるかもしれませんね。ベストセラーとかを小学校が出していたら、それを地域の中学校にそれを共有したら、それを子どもたちがどんな本を読んでいるかわかるから、小学校で読んでいた本が、中学校にもあるという状況はつくる

ことができるかもしれません。そこで情報の共有をできるような、何か仕組みがあればいいですね。

【委員】

指導室です。小学校と中学校での支援司書連絡会で、情報の共有をしていただいています。

【委員長】

おそらく司書教諭の方や学校図書館の支援司書の方が便りを書かれていると思うのですが、そういうものを地域の学校で共有したら、子どもたちがどんな本を読んでいるのかわかるかもしれないですね。そうしたら、小学校にあった本が、中学校で出会えるかもしれません。

【委員】

学校では、司書教諭が図書館支援司書と連携し、地域の学校とも連携しながらその辺りも加味して活動していただいています。

【委員長】

支援学校では、どうでしょうか。

【委員】

支援学校の代表です。本を読む子は、好きに読んでいくと思います。本を読まない子にどうしたらいいかを考えていて、本を好きではない子は字を見たらしんどくなったりしますよね。ですから、ゲームの攻略本や図鑑でもいいので、どんな本でも1日1ページ、1行でもいいので、本に触れる機会を習慣化できたら、面白いと思った時に、自分から進んで見るのではないかと思います。そういう取組ができたらいいな、と思いました。

【委員長】

それは、字が読めない幼稚園や保育園の子どもたちもそうですよね。1日何回か本に触れるということで習慣づける、多分低学年はそうだと思うので、個人差はあると思いますが、みんなやっていかなければいけないことだと思います。

【委員】

ちょっといいですか。これは5年間の計画ですよね。それで、重点目標というのはあってもいいけど、そこだけでいいという話ではないですね。

【委員長】

もちろんそうです。

【委員】

私は、基本的には、この素案でいいのではないかと思います。そこに、先ほど言ってい

た、好きな本に出会えるなどを基本理念に含めて、そしてこの数値目標はもう少し簡略してもいいと思います。そしてこの5年間はこれでいきます、ただし、この5年間については、これを重点目標にしたいので、これを付け加えます、そういうスタイルでいいと思います。

【委員長】

もちろん、小学6年生にだけ手厚く、というのではないのですが、この課題ですよ。これをこのまま継承して、また5年後に同じ結果にならないようにしたい、とは思います。そうすると、今下がっているところを、やはり底上げしてあげる必要があるのではないかと、思います。課題の解決ですね。

【委員】

ですから、これはこのままで、重点目標をおいて、というスタイルですよ。

【委員長】

それが目玉というか、和泉市の計画なのかな、と思います。ですから、評価も全体の細かい評価というよりは、小学6年生から中学1年生に上がった時に、子どもたちがどう変わるか、というのが出てきたらいいな、と思います。

【委員】

全体的に数値目標は簡略化してもいいと思います。

【委員長】

そうですね、目標の結果とは、数字が全てではなく、子どもの姿だと思うので。

【委員】

ここで議論していても長くなるので、基本的な方向性はこれでいって、重点目標の部分を個別に意見を送ってするのか、事務局でまとめるのか、などしていただいた方が。

【委員長】

そうですね、ケースごとにお話をするのがいいと思って、せっかくの機会が集まっているので、今思っていることは出してもらったらいいかな、と思います。本の読み方もそうですが、考え方もそうで、次々と出てくる人と、帰ってからゆっくり考える人もいると思うので、それは随時事務局と連絡を取り合って、意見を出していただいたらいいかな、と思います。それを事務局でまとめていただいて、次回にみんなで考える、というスケジュールでいかかでしょうか。決して完結するような問題ではないと思うし、5年間で飛躍的な発展が見られました、となればすごく素晴らしいですが、このままでは終わらない、というような計画にしていかなければいけないと思っています。また5年後に中学校がダメでした、というのではなくて、「いや、こういうところが中学校は変わったのですよ。」というところを一つでも言えるような計画になればいいかな、と思っています。

【委員】

指導室です。ターゲットについてですが、小学6年生とか中学1年生という話が出ていましたが、対象については全てにしたらいいと思います。最終的にそこで数値を取るのかは、いいと思いますが、先ほど言われていたように、どの段階でその子にとって一番いいか、本が好きになるか、については、その子によって違うので、そこを限定してしまうとそこにあった子どもたちだけが対象になってしまうので、全てを対象にした上で、やっていく方がいいと思います。

【委員長】

対象は全部ですね、0～18歳。でも、課題が出ていますよね。課題については、やっぱり少しでも解消していくべきだと思うので、だからこのままではなくて、課題に関して今回はこういうケアをしていこう、ということで、出来ればいいと思います。もちろん小学6年生だけが対象ではなくて、中学1年生もそうだし、小学5年生や中学2年生もそうだし、そうなるとう全部になるのですが、ガクンと下がっているところはなぜだろうか、どうやったら向上できるかな、というのを考えていきたいと思います。それは、小学校や中学校だけでの問題ではなくて、全部の問題だと思うので、それをみんなで協議できたらいいな、と思います。

【委員】

子育てサークルの代表です。それを達成するのに、事務局がつくっていただいた、環境づくりだったり、連携だったり、啓発活動だったり、というのが必要になってくるのではないですか。その方法を掘り下げて考えていかないといけないと思います。

【委員長】

はい、書いていることは素晴らしいですけど、これは具体的には全然わかりませんよね。今回は大きなテーマが出来たので、次回、何をするのかは、また掘り下げていかねばいけないと思います。今回は、課題を出したよ、というところかな、と思います。他にはございませんか。

【委員】

高等学校の代表です。ここの中で話をしても、正直、アンケート結果しかないので、可能であれば、どこかの中学校に行って、1クラスに話を聞いてみるのも生の意見としていいかな、と思うのですが、そのようなことは可能でしょうか。

【委員長】

どうでしょう、私はそれは大事だと思っていて、自分の研究ではやっていくのですが。みんなで行ってどうするか、ですね。

【委員】

こんなにたくさんでいっても仕方ないですね。こういうことは可能でしょうか、学校の裁量ですか。

【委員】

指導室です。どういう形になるかわからないですが、一斉で見に行くのがいいのか、それぞれの分野で取り組んでいっていることをここで集めている形になるので、違う分野のところを見てみたい、というのはわかるのですが、それぞれ持っている分野の中での情報をここで集めていったらいいと思います。

【委員】

聞き取り調査ということですか。

【委員】

聞き取りではないですが、これだけたくさんで行けばあまり意見はでないと思うので、3人か4人で行って、君たちは本が好きか、とか、小学校時代はどうやった、とか、今はアンケートだけしかないの。そういうのもいいのではないかな、と思います。

【委員長】

やはりそれで行ったら、子どもは賢いので、私たちが欲しいことを言う、と私は思います。

【委員】

そのクラスだけが全てではないので、いろいろなクラスや学校がありますしね。

【委員長】

そうですね、その意見だけというのも、どうかと思いますので、またもうちょっと何かいい意見があればお願いします。小学校、中学校、高等学校と対象が違いますしね。

【委員】

小学校なら地域性も変わってくると思います。逆にそういうのも知っておくのもいいかもしれませんね。

【委員長】

他に意見はございませんか。ないようですので、それでは、次に案件3「今後のスケジュールについて」を、事務局より報告願います。

【事務局】

(案件3について報告)

【委員長】

事務局から、今後のスケジュールについての説明がありました。今年度のうちに、あと3回、策定委員会を開催していきたいと思います。皆様におかれましては、お忙しいところ誠に申し訳ございませんが、ご出席の方、お願いしたいと思います。そこで、早速です

が、第3回の日程について、資料番号3のところに、9月初旬となっておりますが、こちらの方で事務局と調整させていただきましたので、日程の方をお知らせいたします。第3回の日にちは、9月6日の木曜日、時間は午後4時からの開始としたいと思いますが、皆様よろしいでしょうか。よろしければ、会議の場所等を含め、あらためて事務局からお知らせしていただきたいと思います。ですから、それまでに何かご意見がございましたら、事務局の方に、送っていただけたらいいと思います。

それでは、今後のスケジュールについて、何かご意見・ご質問等はございませんか。

【事務局】

皆様でいろいろと意見が出てくるかと思います。一定、期限を切らせていただきたいと思います。思っています、今月末までにご意見をいただきたいと思います。連絡先等は、会議の開催通知の方に入っていますので、FAXやメール等でご意見をいただければ、と思います。それをいただいた上で、計画の素案をもう一度検討したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

【委員長】

ぜひ、ご意見をお寄せください。その他、ご意見はございませんか。ご意見等が無いようですので、委員の皆様におかれましては、新しい第3次計画が策定されるまで、何かとご苦勞をおかけすることになると思いますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。次に、案件4「その他」として、何かございませんか。

ご意見等無いようですので、本日の委員会は閉会させていただきます。

《閉会》